Management Club Report

Aug.2021/Vol.224

Monthly Opinion ≪歯科医院組織力の一級と二級≫

今年は、「強く美しい組織としての歯科医院」について研究を重ねています。「強い組織の歯科医院はどうあるべきか？」「美しい組織の歯科医院とはいかなる歯科医院なのか？」これらは、考えていく上においてどうしても主観的になりがちなテーマでもあります。

「そういう強さは好きではない」「こういう組織の美しさが好きだ」このように好き嫌いといった個人の感覚がどうしても前面に出てしまいがちです。例えば私どもがセミナーで一つのテーマとしている「一流企業としての歯科医院を目指そう」の中で「世の中には大企業でありながら一流企業とは言えない会社がある。歯科医院は規模で言えば中小企業か零細企業だが一流企業を目指してほしい」という主張があります。大企業や中小企業という区別は資本金の額や従業員数といった客観的な数値を基に判定されますが、一流企業と二流企業の区別は、優れて個人々々の主観であるか、もしくはそれらの主観の集積である「世評」という“公の主観”に過ぎません。しかし、この“公の主観”は主観ではあっても、これが社会に定着し一定の評価を伴うようになりますと客観へと変わります。ですから、主観そのものが、個人的な感覚や感情に基づいているからという理由で退けられる理由は全くないと思います。私たちは今の時代や社会における“公の主観”に照らして受け入れられるであろう「強く美しい組織としての歯科医院」を目指すべきであろうと考えています。

そのような考え方に基づいて今月は『歯科医院組織力の一級と二級』について、「こういうレベルは二級」「一級はこうあるべき」といった観点で歯科医院組織の在り方を具体的に考えて参ります。

1 一級歯科医院のあるべき姿

歯科医院の評価は民間個人の主観による

歯科医院が、何か公的な基準に基づいて一級歯科医院と二級歯科医院に区別されているという事実はありませんが、一般市民の間では、それぞれの個人体験を通して抱く主観に基づいてこの区別を行っていることは事実です。

「あそこは凄い！一級の歯科医院だね」

「あの歯科医院は大したことない、ランクを付けるなら二級歯科医院だね」

あるいは、とてもひどい体験をしたような場合には「あそこはひどいよ、二級どころか三級以下だよ」などと言った評価を受けることがあります。